幼稚園の先生に望む

父母

内藤　緑

先生がたも毎日目に見えない御苦労があることと思いますが、出来得る限り、母親はもちろん、父親（その他のかたがた）との懇談の機会を多く持ち、両親の教育方針を同一ならしめるべく御指導をお願いしたいと望んでおります。

今年も幼稚園に入園の時期が近づいてまいりました。

今までは母親の愛情の羽根の下で庇護の生活をしておられた多くのお子様たちが、いよいよ幼稚園という、永い人生で親を離れ家庭を離れての教育の第一歩を踏み出すわけですから、多くのお母様がたは入園当初はお友だちと仲好く出来たかしら、泣きはしなかったかしら、怪我はしなかったかしら、と毎日不安と心配でお子様のお帰りを仕事も手につかずに待っていらっしゃったことと思います。そのうちに今度は、今日は何を教わったかしら、どんなことを覚えて来たかしらと、今までの不安と心配は期待と希望に変化してゆくことに気がつかれたことと思います。

私の子どもも、ある時はお迎えがおくれたといってべそをかき、またある時は僕一人で帰れるからお迎えに来ないで、というので何となく不安でしたが、これも子どもの為と思って電車通りの横断などじゅうぶんに注意して出しましたが、案の状、一時のお帰りが三時になっても帰ってまいりません。女中と手わけして心あたりのお友だちのお家を訪ねてみましたがどこにもおりませんでした。とうとう幼稚園まで来てしまいましたが、「もうとっくにお帰りになりました」と先生はおっしゃるし、もしやと思って家へ電話をかけてみましたら、「今着きました」との返事にまあまあよかったと急いで帰り、子どもに話をきいてみると、家の近くにある自動車の修理工場のおじさんが「遊んでいかないか」といったので、自動車の修理を見てきたというのです。親の心配もよそに元気でにこにこ、むしろ得意気でした。この時は、叱ってよいのか、ほめてやってよいのか、ちょっと迷ってしまいました。しかし家まで子どもの足で二十五分から三十分はかかるし、また電車通りと自動車専用道路と二か所も危険なところがあるのですから、教えられたこと

をよく守り緊張していたことと思います。ですからもう僕は一人で帰れるんだという自信はじゅうぶんについたようです。また自動車の修理を実際に見て、小さいながら何かしら学びとったことでしょう。ほんのわずかなことですが、母親として子どもの成長を喜んでよいのだと思いました。もちろん、幼稚園の帰りやまた他の時でも、お家へだまって寄り道をしてはいけないということは注意してやりました。

こうして幼稚園でまたは幼稚園への往復などで、集団生活とか社会生活というものを体験し培われて、だんだんと社会の一員として成長してゆくのだと思います。

最近の教育方針は、私たちの育った頃とは大分違ってきております。ここで考えなければならないことは現在の教育方針をどの程度吸収し実行出来るかということです。

私ども五、六才の子どもを持つ両親、ことにお母様がたは、お子様の教育に日夜人知れず御苦労なさっていることと思います。私もその一人ですが、幼稚園の会合や参観日などに、園長先生よりたびたび幼児教育の方針及び御経験などをおききし、教育は幼稚園だけのものでなく、家庭と先生が歩調を合せてゆかなければならないことを痛感いたしました。

さてこれも先日園長先生よりおききした話ですが、家族全員の教育方針が同一でなかった為、最上の愛情に恵まれながら子どもは非常に不幸であったということ、またこれと反対に、ある本には、どんなに治療をしてもなおらなかった五才になる男の子の〝オネショ〟が、家族の協力によってすっかりなおったということが書いてありました。その為には家族全員が男の子のために、夕食には塩分の少ない献立を相当長い間がまんしたというのです。また食後は水分をとらせず、それでも始めのうちはそそうしたそうですが、そそうしても母親は決して叱らず、お兄ちゃんは弟の〝オネショ〟を笑ったりせず、根気よく下着をとりかえて上げたのでだんだんそそうすることが少なくなり、男の子は自信をもつようになって、とうとう今まで長い間なおらなかった〝オネショ〟が、家族の愛情によってすっかり治癒した、ということでした。こうした美しい家族の協力愛はなかなか得られるものではありません。

それではどうしたら家族全員の子どもに対する教育方針を徹底させ得るかが問題になってまいります。母親と先生と二人の場合は問題はないとして、父親またはおぢいちゃんおばあちゃんのいらっしゃる御家庭、その他女中・使用人などいらっしゃる御家庭、こういう場合はますます困難になってまいります。これらの人たちが出来るだけ子どもの教育に関心を持ちいろいろと幼児教育の本でも読んで子どもを上手に指導するだけの資格があればよいのですが、この理想的幼児教育は母親でさえなかなか骨の折れるものです。まして仕事の為に毎

日精神的にも肉体的にも疲労している父親が、多少の心得はあったとしても、ある場合は感情的になりきつく叱ることもあるでしょうし、またある場合はまあまあうるさいから、と子どものわがままを通してしまうこともあるでしょう。こうしたことによって、せっかくの母親の一貫した〝しつけ〟にひびが入ってしまいます。父親ばかりではありません。私がそうでした。

私どもの場合は、夫も私も歯科医師という職業をもっているからです。両親ともほとんど診療室ばかりで、たまに子どもが診療室に入って来れば勿論いたずらもしますが、ただうるさいとか邪魔だとか、子どもの要求を無視しておいはらってしまいました。しかしこれも職業上やむをえなかったのです。家庭教育の一番大事な時期に、こうした環境の中に子どもをおいていたのです。どんなに淋しかったことでしょう。そうです、この頃からです。父親と遊んでもらいたいばっかりに九時十時までも起きていて、診療が終ると、さてこれからだ、といわんばかりにパパと遊んでもらうのといってききませんでした。こうして宵っ張りの習慣がついてしまいました。子どもが幼稚園に入る頃から、私も子どもがかわいそうになり、いかに教育したらよいかいろいろと夫とも相談しました。結局、私の場合は、家庭に母親に代るべき人がおりませんので、一定期間職業を捨てて子どもの教育に専心しなければならないと思いました。しかしこれには一大決心が必要です。そう簡単に割切れるものではありません。子どもの方も、長い間についた習慣は改めるのにも長い期日を要します。

家庭の環境、家庭の事情などで、なかなか理想的な幼児教育は本当に困難であると思います。そこで、困難な中を少しでも理想的教育に近づける為に、幼稚園と家庭との連絡を今より一そう密接にしてゆきたいと願っております。幼児教育こそ一生の性格の基礎を築くものといわれております。

すべての母親が完全なる家庭教師でない限り、もしも母親の教育方針に多少なりともまちがったところがあったとしても、時たまの個人面接で先生から忠告または御指導を受けたとしても、それからでは時期的にちょっとおそいような感じがいたします。

幼児教育を受持つおとなの教育がまず必要ではないでしょうか。

子どもにしろおとなにしろ家の人にいわれたことというものは、話し下手なせいもあると思いますが、なかなか反省したり実行したりすることはむずかしいようです。ですから先生方に専門的な立場からお話ししていただけば誰しも納得できると思います。

私も長男には多くの失敗がありましたが、次男には今までの経験を生かし、また先生方の御指導を仰いで出来るだけ立派な幼児教育をしていきたいと思っております。